

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号：

施設名：キャンディパーク保育園3号

施設所在地：葛飾区青戸 2-7-10

法人名：株式会社カラバ

1. 活動テーマ

生き物の生長に興味・関心を持つ飼育活動

テーマの設定理由

園周辺には山椒の木があり、季節になるとアゲハチョウの幼虫が見られる環境にある。このような自然環境を生かし、身近な生き物に触れられる機会を大切にしたいと考えた。

また、実際に青虫を見つけたことをきっかけに興味を示し、「育ててみたい」と関心を持つ子どもの姿が見られたことから、その気持ちを活動につなげたいと考えた。

さらに、飼育や観察を通して成長の変化や命の不思議さに気づき、継続的に関わり中で探求心を育てていく事をねらいとして、本テーマを設定した。

2. 活動スケジュール

5月：園の玄関前の山椒の木で青虫を見つけ、飼育を開始する。

玄関に虫が着たり葉を食べにくる鳥がいたりすることを嫌がる保護者がいたため、山椒の木を玄関から園の裏側に移す。

5～6月：餌やりや観察を行い、生長の変化を継続的に見守る。

6月：さなぎになる様子を観察する。

6～7月：羽化の様子を観察し、成虫となったアゲハチョウを自然に返す。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

園周辺の山椒の木を活用し、子どもたちが実際に青虫を見つけられる環境を整えた。青虫が山椒の葉を食べつくすため、その都度10本ずつ植え続け、青虫にとっていい環境作りを行った。また、保育室内でも継続して観察できるよう、飼育ケースを用意し、安心して飼育出来る環境を設定した。

さらに、餌となる山椒の葉や霧吹きなどの用具を準備し、子どもたちが主体的に世話に関われるようにした。加えて、成長の変化に興味を持てるよう図鑑や写真資料を取り入れ、視覚的にも理解を深められるようにした。

4. 探究活動の実践

園周辺の山椒の木で見つけた幼虫を飼育・観察した。黒い幼虫から青虫へと変化する家庭や、さなぎ、羽化までの一連の生長を継続的に観察できるようにした。

また、餌については山椒の葉を中心に用意し、飼育に必要な環境を整えながら世話を行った。飼育の過程では、さなぎの管理や安全に配慮した環境設定を行い、成長段階に応じた関わりが出来るようにした。

さらに、羽化後は天候や周囲の環境を踏まえ、適切なタイミングで自然へ返す機会を設けた。

〈子どもたちの姿や保育者の声掛け〉

黒い幼虫から青虫へと変化していく様子に驚きや興味を持ち、日々の観察を通して生長への関心を深める姿が見られた。また、初めは触れることに戸惑う様子もあったが、少しずつ頭から緑になっていく様子に興味を持ち、次第に親しみを持つ子も増え、自ら関わろうとする姿へと変化していった。

飼育の中では、「どうして葉っぱをたくさん食べるんだろう」「どんな葉を食べるのかな」といった疑問を持ち、試しながら確かめていく姿や、さなぎや羽化の様子に関心を持ち、継続的に観察しようとする姿が見られた。

保育者は「すこしずつ色が変わってきたね」「どんな葉っぱが好きなんだろう」といった言葉がけを行い、子どもたちの気づきや疑問を引き出しながら考えを深められるように関わった。また、「優しく触ってみようね」「ここにお引越ししても大丈夫かな」と安全面や生き物の配慮を伝え、羽化後は「どんな日にお空に返してあげたらいいかな」と問いかけながら、一緒に考えられるよう援助した。

飛ぶまでに時間がかかる蝶の様子をみて「頑張れ」と応援する姿や、毎朝青虫の様子を見て「元気してるかな」と気にする様子もあった。



↑園の玄関前に山椒の葉を置き、アゲハ蝶の卵や青虫を観察



↑子供たちの意見から山椒の葉を狙う鳥や虫から守るため、また保護者から玄関においてほしくないというクレームがあったため、裏庭の大根の葉に隠す。



↑山椒の葉にアゲハ蝶の卵を見つける。最初は触りたがらない子も興味を示しさわろうとする姿がある。



↑山椒の葉に群がる鳥や虫を狙う猫



↑青虫はなかなか見つけることが出来ず、身を守るために葉と同じ色をしていると子どもが気づく様子もあった。

あおむしを子どもが触ると、「くさい」という意見もあった。

動物は襲われないように、食べられないように臭いを出すという話をすると納得しスキャンクもそうだという意見が出た。

さなぎに成長し、黒く色が変わる事に最初は信じていなかったが、徐々に緑色から黒色になる姿を見て信じるようになった。



↑蝶々になり、飛ぶまで苦戦しながらも飛んでいく様子、子どもからは歓声が上が
る。



↑黄色のさなぎからは羽が片面無い状態の蝶々が羽化する。
羽がない中でも頑張って飛ぼうとする姿を見て個体の強さを感じていた。

5. 振り返り

この活動を通して、保護者の虫への苦手意識が子供にも影響し、初めは怖がる様子も見られていた。しかし、飼育や観察を通して継続的に関わる中で、次第に親しみや愛着を持つようになり、苦手意識が和らいでいく姿を見ることができた。このことから、苦手意識を持つ対象であっても、適切な環境を整えながら関わる機会を設けることで、新たな興味や前向きな気持ちを育むことができると気づいた。また、虫の一

生を見ることで、虫の卵や幼虫があるかもしれないと草花を大事にするようになったり、弱いものや年の老いたものに対しても明らかにとらえ方が変わったりしたように感じた。今後も子どもたちの経験を大切にしたい保育を行なっていきたい。